



謹賀新年

満足とは十分なこと。完成すること。望みが満ち足りて不平のないことです。私たちは日頃なかなか満足できる書は書けないものです。それでも不満なところがあれば、少しでも直して今より良い作品を書きたいと努力し書作していると思います。この繰り返しこそ上達への原動力となっていますので、書を学ぶうえでは、現状に満足せずに向上心を持つことは大切なことです。

さて日常生活では満足できる毎日を過ごしているでしょうか。経済界では経済成長が社会システムとして組み込まれていて、成長しないことは停滞を意味して負の捉え方です。いわば現状に満足することなく常に向上を強いられる社会です。しかし、経済成長が必ずしも人間の幸福度に直結せず、生活満足度と比例しないことが明らかになっています。

満足への道は「少欲知足（欲少なく足を知る）」に徹することともいわれます。「足るを知る者は常に楽しむ」ということわざもあります。また老子にも、「知足者富（足るを知るものは富む）」（老子・第三十三章）とあります。満足することのできる人は、毎日の生活が楽しいものになり心は豊かです。不満に心を乱されることなく、「足るを知る」心を持ち、与えられた今の環境にも満足できる生活をするのが出来れば、本当に素晴らしいことでしょう。そんな自戒を込めて「満足」を書いてみました。

ことしも、皆さまが楽しく心豊かに書に親しむことができますよう、そして書が潤いある生活の一助となることを目標に全力を尽くします。どうかご支援とご協力をお願いいたします。最後になりましたが、会員の皆さまのご健康、ご多幸を心よりお祈りいたします。



平成二十八年 新春

佐藤 象雲

送友人入京

孟浩然

君登青雲去

君 青雲を登りて去る

予望青山歸

予 青山を望みて帰る

雲山從此別

雲山此れ從り別る

淚湿薜蘿衣

淚は薜蘿の衣を湿す

君は青雲のような高い位に登って都へ去り、私は青雲を望んで家へと帰る。雲と山とここから道を分つのかと思うと、涙がかずらの衣をぬらしてしまう。

《青雲》 青空に浮かぶ雲だが、立身出世の象徴。

《薜蘿衣》 かずらで織った布の衣。隠者の衣服。

孟浩然（六八九〜七四〇）は四十歳のころ、科挙の試験を目指して都へ上りました。しかし結果は落第。一方友人は合格し、中央の役人として招聘されます。この詩に詠まれる孟浩然の涙は友人との別れの切なさなのか、それとも故郷に戻るしかない、おのれの不遇を嘆くものだったのでしょうか。

その後、孟浩然是長安の都に出て、王維など詩人たちと親交を結びました。このころの王維は科挙に合格して順調な役人生活を送っていました。

この二人には逸話が残されています。王維が当直にあたっていたある日、宮中に孟浩然を招き入れ、文学論に時を経つのも忘れて興じていました。そのとき、不意に玄宗皇帝が現れ、孟浩然是慌てて物陰に隠れました。しかし、王維のとりなしで、玄宗皇帝に謁見のチャンスを与えられました。そして皇帝の求めに応じて孟浩然是即席で次の一詩「歳暮帰南山」を献上しました。

歳暮帰南山 孟浩然

北闕休上書 北闕上書を休め

南山歸敝廬 南山敝廬に帰る

不才明主棄 不才明主棄て

多病故人疎 多病故人疎んず

（後略）

朝廷の門をくぐって、帝に文書を奉ることをあきらめ、南山のあばら家へ帰ることになった。才能に恵まれないため、英明な天子にも見捨てられ、友人ともしだいに疎遠になってゆく。病気がちのため、友人ともしだいに疎遠になってゆく。

ところが、「不才明主棄」を玄宗皇帝は聞いて、「仕官もしていないのに、棄てたとは何事か」と怒り、孟浩然是仕官の機会を失ったといえます。さてこの逸話は作り話とも言われています。宮廷に一般人が入ることは無理なことで、皇帝が前触れもなしにそんな場所にもお出ましになることもないというのがその理由です。しかし実際に、孟浩然是志しを遂げずに各地を放浪し、その後は郷里に近い襄陽郊外の鹿門山に隠棲する生活でした。

孟浩然の詩は、不遇からくる愁嘆を主とするものと、隠者の超俗的な心境を主とするものの二つの系統があるとされますが、この詩は前者の代表的な詩で、後者には鹿門山に隠棲していた時に詠んだ「春眠曉を覚えず」で有名な「春曉」があります。孟浩然是盛唐を代表する詩人で王維とともに「王孟」と称されました。

袖裏の毬子しゅうり 両三箇、無能にして飽醉ほうすいす太平の春。

袖裏毬子 両三箇 無能
飽醉 太平の春

《大意》袖のなかには手毬が二つ三つ入っている。私は役立たずの能無しだけれども、天が与えてくれるこの太平の春に身も心もたつぷり酔っている。

(良寛詩一節)

柏葉の寿

柏葉の寿

《大意》柏葉は常緑のため、長命の意を含む。(武平一)

賀扇がせん春風を動かし 江路梅香ばし

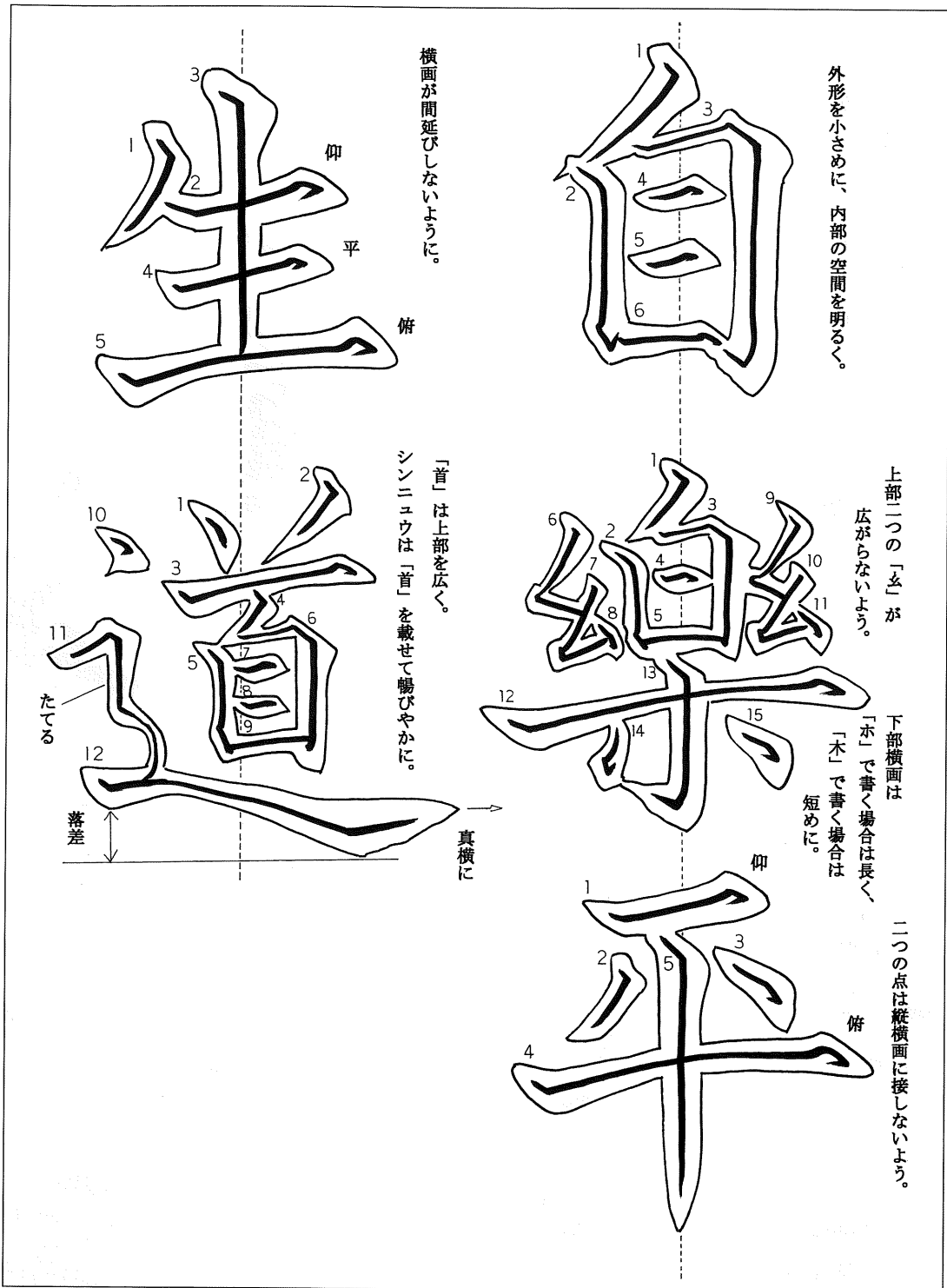
賀扇動春風
江路野梅香

《大意》祝いの扇は春風を誘い、野には梅の香りが漂う。(杜甫詩句)

読み
自ら平生の道を楽しむ（平素の生活の中に道があり、それを楽しむこと。寒山）

白樂平
生道

佐藤象雲書



一般部規定課題出品について
 ・規定課題は段級の区別なく、右掲載の四字句となります。
 ・初段以下の方に限り、左に掲載してあるように二文字でも構いません。
 ・規定課題(楷書)の出品はひとり一点に限ります。

草書

行書

自
樂
平
生
道

自
樂
平
生
道

※成家・師範の随意作品出品は一点までです。

◇各体とも書風は自由です。特に上位者は古典などを参考に創意溢れる作品をご出品ください。

次号課題

隸書

庭
前
看
玉
樹

自
樂
平
生
道



里中、道之周(左)……

■ 史晨後碑ししんこうひ (後漢・西暦一六九年) の臨書 (15)

象雲臨

『里中道之周』

里中道之周

史晨後碑は隸書の成熟期といえる後漢・西暦一六九年の建碑で、礼記碑の十三年後、曹全碑の十六年前ということになります。古代文字や篆隸書などを考察する碑学は清時代になって研究が盛んになりましたが、考証学者王澐は「虚舟題跋」で史晨碑を「肅括」という言葉で形容しています。肅は「厳か、慎ましい、整う」などの意味を含み、括は「まとめ」の意味がありますから、厳正で隅々まで行き届いた書きぶりということですね。また王澐は続けて「史晨碑は謹嚴。隸を学ぶものは須らく史晨に始めて以つてその趣を正し……。」と述べています。ほかの考証学者や書家の史晨碑の位置づけもほぼ同様で、古く落ち着いていて厳しいという評価です。隸書入門は曹全碑からとよく言われますが、それは文字が鮮明なことで流麗な波磔をもち規矩に適って隸書体の特徴を理解し易いためです。その一方で華美に流れるさらいがあり、私は古雅に富んだ史晨碑を最良の隸書古典として推奨しています。さて今月の五文字は線の軽重の配分が計算されて安定し、また重厚感があり、史晨碑の前記の特徴がよく表れている部分です。

極視聽之

視聽の(娛しみを)極む

極視
聽之

象雲臨

■王羲之・蘭亭序(東晋三五二年頃)の臨書(17)

「極視聽之」

「蘭亭序は聚訟のごとし。」と言われます。聚訟とは「いろいろがやがやと是非を問う」という意味です。蘭亭序は古くから多くの臨本刻石が作られ、八百蘭亭などと言われますが、一体どれが王羲之の真を得ているか喧しい議論がありました。清末の李文田は蘭亭が梁・陳以降の偽作であると唱え、近年では郭沫若氏が蘭亭偽書説(一九六五)の論文を発表して、蘭亭序自体が王羲之に仮託した偽物だったという説まで出ました。現在ではこれらの議論は影を潜め、蘭亭序の書法上の価値や評価は不動のものになっています。

一方で、歐陽詢系の定武本や褚遂良系の褚臨本など、それぞれに書法的に独立した規矩を備えていて、非常に習い応えのある王羲之第一の古典として学書者を魅了し続けています。

今月の部分は、真跡系(本誌掲載)と、神龍半印本などの褚摹系や定武など欧陽詢系の筆遣いの違いが一番明らかな部分です。「極」の中央部の筆遣い、「視」の示偏の書き方、そして「聽」の耳偏の横画の本数などです。その違いは臨書とはいえ、明らかに唐の三大家の考え方が反映されていて非常に興味を持たれるところです。